和田廃寺の調査

昭和49年7月～10月

橿原市和田町北方の水田中には，礎石2個を残す「大野塚」と呼ばれる土壇があり，その周辺からは飛鳥時代から奈良時代にかけての瓦が出土することが，古くから知られている。また，付近には，「トンダ」・「トウノモト」等の寺に関係する字名のみられることなどから，飛鳥時代創建の寺院が存在すると考えられていた。しかし寺名については明らかでなく，地名をとって和田廃寺と呼ばれている。和田廃寺に関しては，「大野丘北塔」とする説，「葛木寺跡」とする説などがあるが，いずれも確かな根拠に乏しく，寺院の沿革については不明であった。

今回の調査は，「大野塚」土壇の南側に接する水田に於て，宅地造成の計画が立てられたため，この工事に先だって行ったものである。

調査地は字「ヤブノウラ」・「金池」の水田で，発掘面積は約33aである。

発掘地区は，小墾田宮推定地付近から西へなだらかに傾斜する低い台地と，甘橿丘北麓をなす「庵山」の低い丘陵にはさまれた浅い谷状の地形のほぼ中央部にあたっており，この谷状の地形がさらに西へ延びるところから，旧河道の存在が予想された。

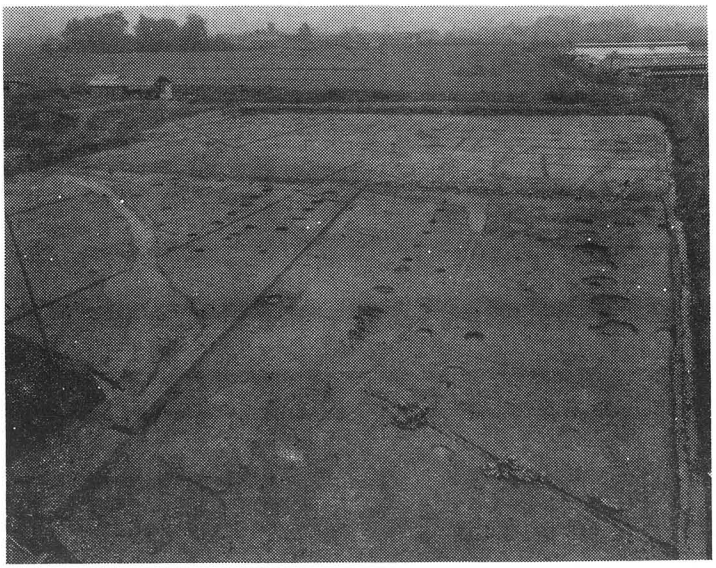
調査の結果，この地形は弥生時代から鎌倉時代まで続いた旧河道（SX 100）で，調査地区南半をしめていた。SX100は河床の砂礫層の広がりからみて，流路・川幅とも時代によって複雑に変化していたことが確認できた。この河道は最終的には，護岸の杭列をもつ溝（SD045B）となる。溝埋土中から出土した瓦器からみると，13世紀頃にはこの溝も消滅し，その後この地域は全面水田化したものと考えられる。SX100の旧河道上，及び北岸からは，掘立柱建物8，柵5，溝3，井戸1，暗渠1，石敷遺構1などの多数の遺構を検出した。遺構は，古墳時代，飛鳥時代，鎌倉時代の3時期に分れる。以下に主要な遺構

について，簡単に紹介する。

まず，飛鳥時代の遺構から述べると，調査地の南半部を河川SX100が，和田丘陵の北に沿って東から西へ流れる。その北岸の堆積土の上に，後に石敷（SX110）が造られる。護岸の石敷は，破壊が著しいが，復原すると，東西44m以上，幅約4mとなる。調査地の東側にある石組溝（SD101）は，東から南へ曲折して設けられ，SX100へそそいでいるが，この石敷と同時に附設されたものであろう。

SA120以北では，東西建物（SB150・160）と東西柵列（SA130・140）がある。SA130は6間分，17.5m，SA140は5間分，14.5mを検出したが，さらに東に延びるものである。SB150は4×1間，SB160は8×1間である。いずれも柱穴から7世紀代の瓦を検出した。これらの柵・建物群がすべて同時期の建立にかかるものかどうかについては，にわかに決定し得ないが，出土遺物からみて，相前後して設けられたと考えられる。

河川（SX100）は7世紀後半に一部埋戻され，造成の後，建物がつくられた。建物（SB050）は6×3間あり，柱間間隔は，桁行2.1m，梁行2.2mである。今回検出した中では，最も整った建物である。この建物の北西にある井戸（SE070）は須恵器大甕の底を打ち欠き，中にこぶし大の玉石を詰め，井戸として転用した甕井である。甕は直径1.1m，肩部に六耳環をつけている。調査地の東南から井戸，しがらみの方向に延びる暗



和田廃寺調査地全景（南から）

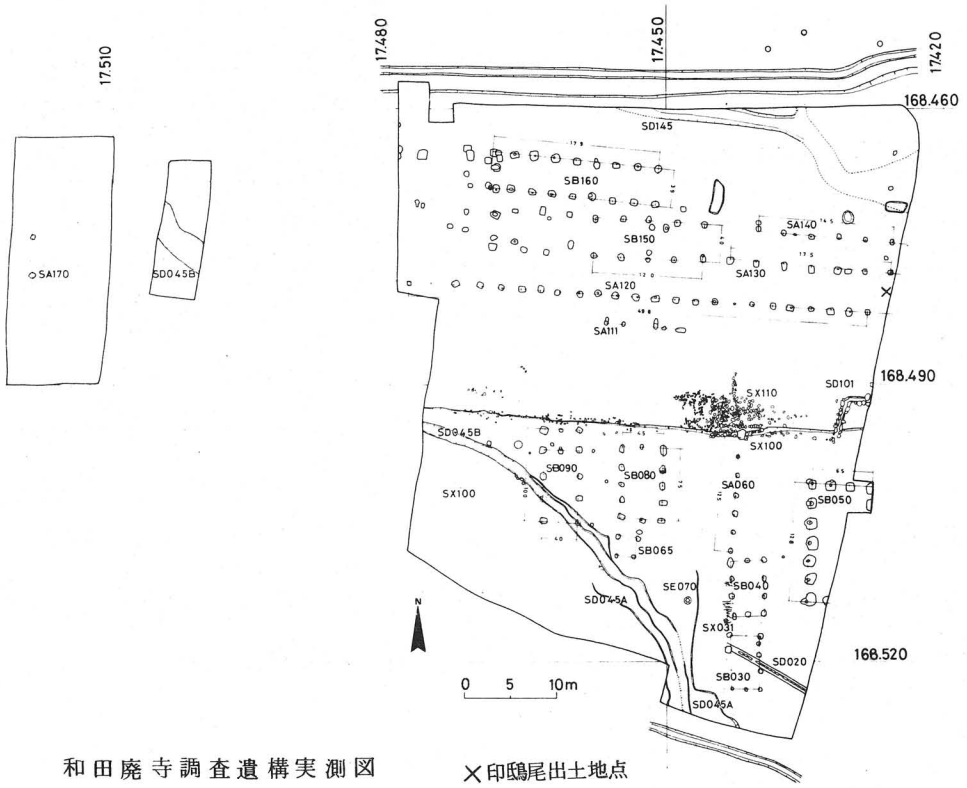
渠（SD020）がある。暗渠は瓦製土管を16個も連結していたが，暗渠上の施設は認められなかった。

建物（SB030・040）はいずれも3×2間の南北棟で規模も小さく，柱筋も通っていない。SB030はSD020より新しい。SB040の廃絶後には，再び河川がこの付近を流れたらしく，しがらみが作られている。しがらみは，細い杭を斜めに打ち込み，杭・竹などをからませていた。

鎌倉時代の遺構は，調査地の南半部にあたる河道埋土上から検出した。調査地の東南から西北に流れる溝（SD045）は長さ80mまで確認した。建物は，この溝の東に近接し，一部重複している。建物（SB080・090）は，いずれも4×2間の南北棟である。SB080は掘立柱建物であるが，1個所だけ根石を置き，自然石の礎石をすえている。SB090は瓦器を含むSD045Bより古い。

古墳時代の遺構は調査地北端で溝SD145を検出した。

遺物には，土器・瓦・鴟尾・瓦製土管・塼・木簡・木製品などがある。ここ



和田廃寺調査遺構実測図　　×印鴟尾出土地点

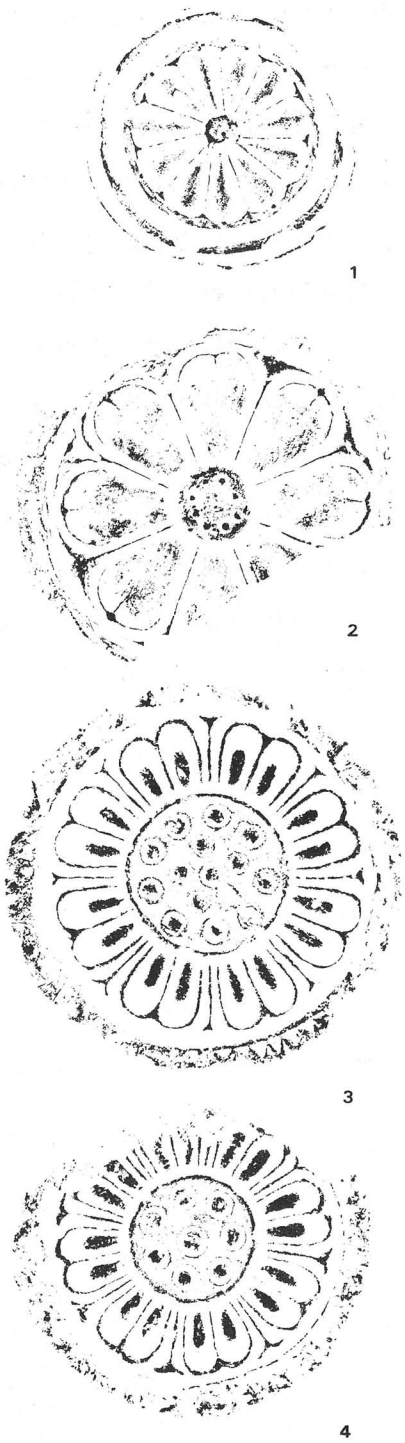
では寺に関連の深い瓦・鴟尾を主として紹介する。軒瓦は，軒丸瓦13型式66点，軒平瓦３型式13点が出土した。

軒丸瓦には，豊田廃寺（天理市）出土のものと同笵かと思われる単弁11弁蓮華文瓦（図１）が６点，豊浦寺，奥山久米寺出土のものと同型式の単弁８弁蓮華文瓦（図２）が16点ある。この他に，飛鳥寺創建のものと同型式の単弁１０弁蓮華文瓦や豊浦寺出土の高句麗系の，弁間に珠点を配する型式のものなど，飛鳥時代に属する多様な型式の軒丸瓦が出土している。また，川原寺創建時のものと同笵の複弁８弁蓮華文瓦（図３）が11点，中房の蓮子が一重にめぐる高麗寺出土のものと同型式の複弁８弁蓮華文瓦が13点出土している。

軒平瓦は，軒丸瓦の種類が多いのに比して，３型式13点が出土したにすぎない。顎面文をもつ重弧文瓦の他，上外区に細い線鋸歯文のある葡萄唐草文瓦の退化型式とみられるものが出土している。他に，３回反転の均正唐草文瓦が８点ある。

道具瓦には，面戸瓦・熨斗瓦がある。面戸瓦には，行基葺き丸瓦を分割して作った特異な形をしたものが，鴟尾出土地周辺から一括して出土した。熨斗瓦は４点あり，いずれも厚手の平瓦を２分割，あるいは３分割して作ったものであるが，全長の判るものはない。

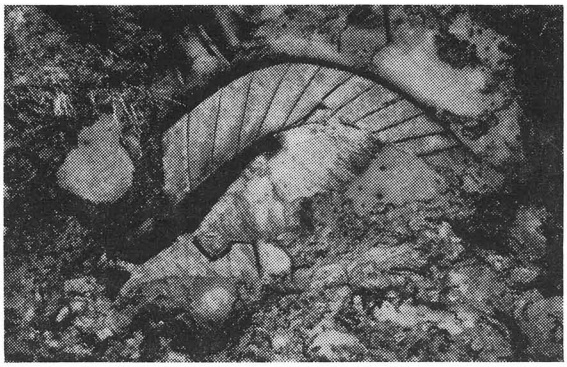
丸・平瓦は現在整理中であるが，凹面広端



和田廃寺出土軒丸瓦（縮尺4分の１）

よりに同心円文叩き目を残す破片があることは注目される。

鴟尾は，完形に近い大形品１個体分と，数個体分の破片がある。完形に近い大形品は，高さ約130㎝，前後長さ約80㎝，幅約55㎝の大きさに復原できる。これは，その形態，胴部文様の特徴から，玉虫厨子例，伝山田寺出土例の系譜につながるものであり，７世紀後半中頃のものと思われる。出土地点は，SA１２０の東端北側の旧地表上から，多数の丸・平瓦とともに出土した。



鴟尾出土状況

瓦製土管は，SD０２０の暗渠に使用されていたもので，16個体分ある。長さ55㎝，広端径 18.9㎝，狭端径 12.6㎝をはかる。行基葺丸瓦と同じ製作手法で作られたものである。７世紀後半のものと考えられる。

土器には弥生式土器，土師器，須恵器，黒色土器，瓦器などがある。SD145の古墳時代溝からは，布留式土器の古い段階に属する壺・甕・鉢・器台・高杯など良好な資料が出土した。SX100 からは弥生式土器や古墳時代から奈良時代にかけての土器が混在して出土した。

以上に述べたように，今回検出した遺構からは，和田廃寺の寺域，あるいは伽藍配置等を適確には握むことができなかった。しかし，鴟尾・瓦等のあり方からみて，調査地は飛鳥時代から奈良時代にかけて存在した寺院の一部にあたる可能性は強い。その場合には，柵（SA１２０）は寺域の南限を画する施設として理解できると思われる。北接する水田中にある「大野塚」土壇とSA１２０間の距離は約55ｍである。中心伽藍をこの「大野塚」を中心とした一画と想定することは充分可能と考える。なお，発掘地点付近は，推定藤原京朱雀大路にあたっているが，これを証するまでには，さらに時間を要する。